

ガザ：125年にわたる排除主義アジェンダの集大成

ガザでのジェノサイドは2023年10月7日に始まったものではなく、単一の暴力行為に対する反応でもありません。これは**125年にわたる政治的プロジェクトの集大成**であり、その目的は**パレスチナの土地を奪い、先住者を抹消し、植民者人口に置き換える**という明確な排除主義の目標を掲げて始まりました。ヨーロッパのレイシストが使う「レコンキスタ」のレトリックとは異なり——彼らは少なくとも祖先のつながりを主張しています——これは「再」征服ではありません。これは外部者による征服であり、排除しようとする人々の存在そのものを否定することに基づいています。

1897年の第一シオニスト会議から、ゴルダ・メイアが「パレスチナ人という民族は存在しない」と主張し、ヨセフ・ウェイツが「唯一の解決策はアラブ人のいないパレスチナ」と断言し、ラファエル・エイタンがパレスチナ人を「瓶の中のゴキブリ」と呼ぶなど、歴代のイスラエル指導者の発言に至るまで、イデオロギーの核心は変わっていません。目標は常に「完全なイスラエルの地」、**Eretz Israel Hashlema**であり、川から海まで、先住者から解放された土地です。

現場の非対称性：名ばかりの戦争

イスラエルはガザでの行動を「戦争」と位置づけていますが、これは歪曲です。国際法における戦争は、比較可能な二つの軍事力間の衝突を前提としています。ガザにはそのようなものはありません。展開されているのは戦闘ではなく、世界で最も先進的な軍の一つ——米国、英国、ドイツに支援された——による、包囲された民間人に対する一方的な攻撃です。

2025年3月3日以来、イスラエルはガザに**完全な包囲**を課しています：**食料なし、水なし、医薬品なし、燃料なし**。統合食料安全保障段階分類（IPC）は**ステージ5の飢饉**——最も壊滅的なレベル——を宣言し、子どもたちが毎日飢餓で死に続けています。病院は廃墟となり、住宅の90%が破壊され、2023年10月以降、**6万人以上のパレスチナ人が殺害**され、その大半が女性と子どもです。

これは比例応答ではありません。それは**殲滅**であり、集団処罰、市民の標的化、戦争の武器としての飢餓の使用を禁じるジュネーブ条約に直接違反しています。

物語の非対称性：物語の支配

殺戮は真実に対する戦争によって反映されています。イスラエルの軍事情報部8200部隊、AIPAC、ADL、AJC、UN Watchなどの西洋のロビー団体、そしてBBCの長年の中東編集者などのメディアの門番たちは、何十年にもわたり物語を形成してきました。

ガザのジャーナリストは単なる付随的被害者ではありません——彼らは**体系的に標的にされています**。2023年10月以降、少なくとも242人が殺害され、記録された歴史上最も高いジャーナリスト死亡率です。外国メディアがガザへの入国をほぼ完全に阻止されている中、イスラエルは外部の世界が破壊を見るレンズを制御しています。パレスチナの情報源からの数字は「ハマスのプロパガンダ」として却下され、イスラエル軍の声明は事実として報道され、虐殺の規模と意図を消し去る偽のバランスを生み出しています。

2025年7月26日の**Handala**事件は象徴的です。ノルウェー国旗を掲げた人道支援船は、医師、議員、ジャーナリスト、飢えた子どもたちのための粉ミルクを運んでいましたが、**国際水域**でイスラエル軍によってハイジャックされました——UNCLOS第101条に基づく明白な国家海賊行為です。援助物資は押収され、乗客は拘束され、飢饉は続きました。これは安全保障についてではありませんでした。それは目撃者を黙らせ、包囲が破られないようにすることでした。

機関の非対称性：免責の盾

こうした残虐行為を抑制するために設計された国際法制度さえも覆されてきました。**米国は国連安全保障理事会での拒否権**を使用して、イスラエルを非難するほぼすべての決議を阻止し、機関を麻痺させ、イスラエルを制裁や執行から守っています。

この制度的保護は**公然の政治的掌握**によって強化されています。2024年11月6日、AIPACはソーシャルメディアで、**支持した190人の候補者**が米国議会選挙で勝利し——民主党と共和党の両方で——「米国とイスラエルの関係への超党派の支持を強化する」と自慢しました。これは陰謀論ではありません。それはロビー自身が祝う公開記録です。その結果、議会は定期的に数十億の軍事援助を承認し、ICJの判決を無視し、イスラエルに国際法の最も基本的な条件さえも強制することを拒否しています。

国際刑事裁判所（ICC）と国際司法裁判所（ICJ）は、イスラエルにガザへの人道援助を許可する暫定措置を発令しました。イスラエルはそれを無視しても何の結果も受けていません。ICC検察官カリム・カーンは中傷キャンペーンに直面し、休職を余儀なくされました。彼の副官たちは現在の包囲の背後にいるイスラエル指導者に対する令状を追求していません。イスラエルを批判するいくつかのICC裁判官や国連職員は米国によって制裁を受けています。これはシステムの失敗ではありません——これがシステムであり、一つの国家を責任から守るために曲げられています。

言葉の否定から物理的抹消へ

1世紀以上にわたり、シオニスト指導者はパレスチナ人の存在の**言葉の否定**と現場での**物理的抹消**を組み合わせしてきました。スローガンは変わったかもしれませんが——「人のいない土地を人のいない民に」から「イスラエルには自衛の権利がある」に——しかし目標は変わっていません。すべての戦争、虐殺、強制移住は、土地のもう一つの「一片」を奪い、パレスチナ人のいないパレスチナへのもう一歩でした。

1924年のヤコブ・イスラエル・デ・ハーンの暗殺から、シオニズムに反対したため、1948年のデイル・ヤシン虐殺、1982年のサブラとシャティラ虐殺、2001年のガザ空港の破壊、そして21世紀のガザへの繰り返される大規模攻撃に至るまで、イスラエルはテロ、民族浄化、包囲戦争など、あらゆる手段を使って領土的野望を達成することを示してきました。

結論：ガザの最終局面

今日ガザで起きていることは、イスラエルの歴史からの逸脱ではありません——それはその論理的結論です。1897年にバーゼルで構想された**排除主義アジェンダ**は、何十年にもわたる非人間化のレトリックと体系的暴力によって支えられ、その最も大胆な段階に達しました。

ガザは戦場ではありません。それは、国家が世界の目の前でジェノサイドを犯し、実際の結果に直面しないかどうかを試す試金石です——証拠が不足しているからではなく、物語を掌握し、機関を麻痺させ、地球上で最も強力な立法機関の忠誠を確保したからです。

もし世界がこれを許せば、メッセージは明確です：**国際法は任意であり、人権は交渉可能であり、ジェノサイドは適切な場所に適切な友人を持っていれば自衛として再ブランド化できる**ということです。